

村上 伸先生のご退任にあたって

守屋 彰夫

「伝道に専念したいので、教授職を辞したい」と村上 伸教授から相談というよりも、宣言、ないし通告を受けたのは、1994年の晩秋であったと記憶している。青天の霹靂のような衝撃が体内に走ったが、努めて冷静に受け止めようと心がけた。予感しなかったわけではない。だが、「来るべきものがきた」というその瞬間に臨むのは辛い。その時まで先生とはこの大学では4年ほどキリスト教学担当の先輩、同僚として一番身近でご指導、お付き合いしていただいた。その間、先生が本質的に牧師なのだということを常日頃いろいろの場面で目にしていた。教授職にあることと、牧師であることとは、必ずしも矛盾するとは思わない。けれども、大学が牧師の本領を遺憾無く発揮する場かという、百パーセント肯定的に答えることには躊躇せざるを得ない。先程、予感と記したのは、このことを村上先生との最初の出会から直感的に感じていたせいかも知れない。しかし先生がこの大学で果たしている重責を考えると、それを担う人は他に誰もいないのは明らかだ。引き留めなければ、という切羽詰まった思いと同時に、牧師が伝道に専念したいという希望に対して反対するような権利を誰がもっているか、という思いが交錯して言葉を失った。結局、先生のご希望、敢えて言えば信仰上の「召命」を受容して、痛惜の念を抑えて喜んで送り出すよりほかに道はないと思った。

村上先生は1930年のお生まれだから、敗戦の1945年には15歳、最も多感な年齢の時代にそれまでの価値観が180度もの見事に転覆するのを目撃したことになる。陸軍幼年学校から東京神学大学への道程は精神的に決して平坦ではなかっただろう。1955年、東京神学大学大学院修士課程を修了と同時に、先生は愛知県安城教会で開拓伝道に従事した。その後1974年まで、岡崎教会の牧師として牧会に携わった。その間、1966年から68年まで、ベルリン、グッパータール、ボンに留学されて神学の研鑽を積まれた。1974年から78年まで、南西ドイツ福音主義教会世界宣教局研究主事として西ドイツに滞在された後、1978年4月に、本学にキリスト教学の教授として赴任された。以来、1996年3月、停年扱いでご退職なさるまで18年間教鞭を執ってこられた。停年まであと2年を残している。

1978年4月の赴任で突然本学との関係が生まれたように見えるが、いろいろ偶然の伏線はあったように思われる。先生が学ばれた当時の東京神学大学は、現在の現代文化学部にあった。チャペルなどは当時のままであるし、教員住宅もまだ牟礼キャンパスには残っている。神学生が騒がしいとってそこに住んでおられた神学大学の先

生に叱られたエピソードなどを先生は懐かしそうに語って下さった。又、女子大の体操の先生が神学校の非常勤講師を勤めておられて、時々善福寺の女子大の体育館を使って講義があり、若い神学生にとってそれが大変な楽しみであったという。旧体育館は先生の青春の一ページを飾る場であったのである。先生を女子大にお招きした当時の関係者の証言によると、その時の原島 鮮学長は、東京女子大学教会設立の構想を胸に秘めていた。文理学部教授であると同時に、大学教会牧師としての適任者を探しているなかで村上先生に白羽の矢が立てられたとのことである。東京女子大学教会構想は様々な理由で実現には至らなかったが、現在でも、将来の東京女子大学のキリスト教を考える上で依然としてこれは真剣に考慮すべき課題のように思われる。

さて、村上先生は、本学ご着任後は、キリスト教学科の主任の他に宗教委員長として学部のみならず、大学全体のキリスト教の責任を担われた。又、評議員としても職責を果たされた。学外では、全国規模のボンヘッファー研究会を主宰し、多くの研究者や牧師に学問的刺激を与え続けた。最近のご著書『ボンヘッファー』(1991年)は、一般読者層に向けられた作品であるが、長年の研究成果がいかんなく注ぎ込まれている。

先生の学問的業績の中では、ボンヘッファーやバルト研究で培われた組織神学者としての素養と鋭い感性に裏打ちされた多数の神学的論文が、大きな功績として先ず言及されるべきだろう。その対象がたとえ時事的問題であろうとも、本質的、根本的(=ラディカル)であるが故にその論陣の張り方は論争的であり、そこに先生の真価が余す所なく発揮されたと言えよう。殊に、1989年に東ドイツの社会主義政治体制が崩壊した際の状況分析は、東ドイツの教会体制に通暁された先生にして初めて可能なものであり、苦悩に満ちた社会、教会への鋭角的切り込みと呻吟する人々への共感が克明に描写されている。一方、現代社会が抱える様々な問題や矛盾に苦悶するわれわれが先生の説教を聴いたり、それらをまとめた説教集を読む時、イエス・キリストの根本的(=ラディカル)な愛を身近に実感し、大いなる慰めを見い出して感動する。神学者にして偉大な説教者の両面を備えた先生の面目躍如たる側面が如実に現われていると言えよう。

その他に先生は若い頃から翻訳を通してドイツの学問の紹介にも努められた。E. シュタウファー『新約聖書神学』(1964年)、カール・バルト『キリスト教倫理 III—生への自由—』(1964年)、D. ボンヘッファー『キリスト論』(1966年)が比較的若い頃の翻訳であり、それ以降最近のE. ベートゲ編『ボンヘッファー獄中書簡集』(1988年)に至るまで神学関係の様々な翻訳はずっと継続されている。

先生は、ご退任後は、みくに伝道所と赤岩 栄牧師がかつて牧会していた上原教会との合同という大変困難な課題に取り組んでおられます。この牧会者としての本来の使命が完全に果たされるよう心より願っております。しかし、この他に、富坂キリスト教センターの理事長という重責をも担っており、女子大からの解放は必ずしも牧会専念には直結しなかったようだが、ご健康が支えられ、益々のご活躍を願っています。